

全米経済教育合同協議会・F・サンダース他著

岩田年浩／山根栄次訳

『経済を学ぶ・経済を教える』

(ミネルヴァ書房, 1988年)

栗原久

加速器や電子顕微鏡の開発は、物理学や生物学に大きな学問的進歩をもたらした。これにより、我々の自然認識はよりいっそう確実なものとなった。自然科学の世界では、新しい装置の開発が我々の認識を深める。

一方、社会を認識するという場合、加速器のような目に見える装置を準備することによって認識が深まるという図式は、そのままでは当てはまらない。社会に対する認識を深めるためには、目に見える装置に代って、概念という「装置」を我々自身の脳裏にしつらえることが必要である。社会科学の進歩は、コトバに厳密な定義を与え、概念の体系を作り上げることによってもたらされたものだ。

社会科教育は、子どもたちの社会認識を科学的・合理的なものとするという責務を負っている。そこでは当然、社会諸科学の成果が指導内容として盛り込まれることになる。したがって、教授者である教師には、社会諸科学に対する十全な理解が必要とされる。

ところで、経済学はかつて「社会科学の女王」と呼ばれた。それは、経済学が社会諸科学の中で、もっともエレガンスな理論体系を構築すること（つまり、物理学よろしく数学というコトバにより世界を表現すること）に成功したからである。しかし、経済学の理論が科学としての体裁を整え、エレガンスさに磨きをかけるのに伴って、門外漢には容易に近寄りがたいものとなってしまった。多くの社会科教師にとっても、事情は同じであろう。社会科教育研究の諸分野の中で、理論・実践両面での研究がもっとも立ち遅れているのは経済教育の分野であるとされる、少なくともひとつの原因はここにある。

そこで、解りやすく、さりとして、昨今流行の経済マンガのように、現象面を追いかけるのではない、あくまでも経済学の成果に立脚した著作が求められてきた。F・サンダース他著『経済を学ぶ・経済を教える』は、このような要望に応えるものである。

本書は、アメリカ合衆国における経済教育普及のための組織として知られている Joint Council on Economic Education の研究成果、A Framework for Teaching the Basic Concepts の翻訳である。訳者は大阪教育大学の岩田年浩氏と三重大大学の山根栄次氏。岩田氏は理論経済学研究者、山根氏は社会科教育研究者、ともに経済教育への関心が強く、この分野での先駆的研究論文も発表なさっている。まさに格好の翻訳者を得ての出版と言えよう。

内容上の特徴は以下の三点である。

第一に、本書が経済教育の目的を明確にしていることである。本書は「生徒が効率的に意志決定ができ、責任ある市民となる準備をすること」(p.14)に経済教育の目的をおくことを宣言する。これによって、公民的資質の育成を目的とする社会科教育のなかでの、経済教育の重要性を認識することができる。

第二には、本書が記述のほとんどを「大学以下の学校段階において経済学を教えるための一連の基礎的な概念を簡潔に示すこと」(p.8)にあてていることである。具体的には、22個の経済学概念と測定概念の意味を、新古典派経済学の観点から明確にしている。これらは、JCEE が責任ある市民として最低限身に付けていなければならないとする概念群である。我々は本書を読むことにより、日常語に特殊な意味を与えることによって成立している経済学の世界の一端を理解することができよう。また、変動激しい経済社会を理解するためのミニマムエッセンシャルが何であるのかを知ることができる。なお、これら経済学概念を、どの学年段階で、どのように教えれば効率的であるかということへの示唆も、本書から得られる。

第三には、本書が具体的な経済問題に対して、我々がどうアプローチして、どう意志決定したらよいかという筋道を、段階をもって示していることである。「合理的方法」と題された5つの段階は、「生徒が問題に対して体系的な手順を踏めば組織立った思考ができる」(p.22)ことを示したものである。しかし、訳者も示すとおり、この「合理的方法」は、単に個人の意志決定の合理化の手順を示しているだけではなく、これを社会科教育の学習過程として捉えることもできよう。

このような諸特徴を備えていればこそ、本書は「アメリカにおける経済教育のバイブル」(p.2)としての地位を得ることができたのである。事実、アメリカにおける経済教育研究の多くは、本書に言及することを忘れない。なお、JCEE は、本書で示された概念を、諸学年・諸科目でどのように教えるのかということを示す指導書、生徒の理解度を測定するためのテスト教材なども準備している。

経済教育は理論・実践の両面で、ますますの研究が必要とされている。そのためにも、本書が多くの読者により熟読され、活用されることを希望する。(埼玉県立行田女子高等学校)